

第17回 鹿沼市民文化センター名作映画祭

池部 良、石原裕次郎、
高倉 健、鶴田浩二、

個性豊かな男優たちの魅力があふれる作品を上映いたします。



① **暁の脱走** [1950年 新東宝 110分]
出 演：池部 良、小沢 栄、山口淑子 他
上映時間：午前10時00分から午前11時50分



② **嵐を呼ぶ男** [1957年 日活 100分]
出 演：石原裕次郎、北原三枝、金子信雄 他
上映時間：午後0時40分から午後2時20分



③ **網走番外地** [1965年 東映(東京) 91分]
出 演：高倉 健、南原宏治、丹波哲郎 他
上映時間：午後2時40分から午後4時11分



④ **人生劇場 飛車角と吉良常** [1968年 東映(東京) 109分]
出 演：鶴田浩二、高倉 健、若山富三郎 他
上映時間：午後4時30分から午後6時19分

10月10日(金) [開場]午前9時30分 [上映時間]午前10時00分～午後6時19分
8月9日(土) 販売開始 かめまケーブルテレビホール(鹿沼市民文化センター) 小ホール

全席自由 前売券 500円 当日券 1,000円

4作品ともご覧になれば再入場もできます。

※開催前日までの鹿沼市民文化センターへのご予約は前売券扱いとなります。

※就学前のお子様は入場できません。

■主 催：(公財)かめま文化・スポーツ振興財団／鹿沼市／鹿沼市教育委員会
国立映画アーカイブ

■特別協力：文化庁／(社)日本映画製作者連盟／全国興行生活衛生同業組合連合会／松竹(株)／
東宝(株)／東映(株)／(株)KADOKAWA



**プレイガイド
8月9日(土)
発売**

- かめまケーブルテレビホール(鹿沼市民文化センター)／0289-65-5581
- 福田屋百貨店鹿沼店／0289-63-0011
- 宇都宮市文化会館プレイガイド／028-634-6244
- 福田屋ショッピングプラザ宇都宮店／028-623-5269
- とちぎ岩下の新生姜ホール(栃木文化会館)／0282-23-5678
- TKCいちごアリーナ(鹿沼総合体育館)／0289-72-1300
- フレンドリーかめま(まちなか交流プラザ2F)／0289-63-2204
- ※フレンドリーかめまは8月12日(火)発売

※状況により中止又は延期となる場合がございます。ご来場前に鹿沼市民文化センターのホームページをご確認ください。

お問い合わせ先

かめまケーブルテレビホール(鹿沼市民文化センター) ☎0289-65-5581



作品紹介

◆暁の脱走



〔1950年／新東宝／白黒〕〔主な出演者〕池部良、小沢栄、山口淑子

肉体派文学を提唱し、一世を風靡した田村泰次郎による人気小説「春婦伝」を、監督デビュー3作目の谷口千吉が映画化した戦後反戦映画の代表作。敗戦間近の中国戦線で激しい恋に落ちた上等兵の三上(池部良)と慰問団の歌手・春美(山口淑子)は、敵の捕虜となって送り還されてくる。二人を迎えたのは数々の汚名と上官の嫉妬。軍曹の助けを借り、部隊からの脱走を試みる二人に、残酷な結末が待ち受けていた。谷口と黒澤明が共同で執筆した初稿シナリオは占領軍の検閲官により何度も書き直しを命じられ、難産のうえに完成を見た作品であったが、満洲映画協会のスター「李香蘭」として活躍していた山口をはじめ、中国で捕虜になった谷口、中国戦線に従軍していた池部、田村と、外地での体験を持つスタッフ・キャストの結集により、日本軍の非人道的な階級制度を激しく糾弾する野心作となった。「キネマ旬報」ベストテン第3位。翌年のカンヌ映画祭へ日本からの正式作品として出品されるとともに、香港および東南アジア諸国に輸出された戦後初の日本映画である。

◆嵐を呼ぶ男



〔1957年／日活／カラー〕〔主な出演者〕石原裕次郎、北原三枝、金子信雄

実兄・石原慎太郎の小説を映画化した『太陽の季節』(1956、古川卓巳監督)でデビューした石原裕次郎は、中平康の『狂った果実』(1956)や田坂具隆の『乳母車』(1956)など、新鋭、ベテラン監督の話題作に出演し、着実にスターの道を歩み始めた。港町を舞台にした『俺は待ってるぜ』(1957、蔵原惟繕監督)では、「ここではないどこか」を求める孤独な青年を、甘い感傷を交えて演じ、自らのイメージをスクリーン上に描き出した。また同名の主題歌もヒットさせ、歌う映画スターとしての出発とした。本作はその裕次郎のイメージを決定的にした記念碑的な作品である。1958年の正月映画として公開され、総配収3億5,600万円(当時の平均入場料62円)を超える大ヒットとなり、1954年に製作を再開した日活にとっても、その後を決定づけた作品である。監督の井上梅次は新東宝からの移籍組だが、裕次郎が指を負傷してドラムを叩くことができず、とっさにマイクを握って歌い始めるというツボを押さえた演出で観客を楽しませ、この一代の大スターの誕生を導き出した。

◆網走番外地



〔1965年／東映(東京)／白黒〕〔主な出演者〕高倉健、南原宏治、丹波哲郎

日本における映画観客数は1958年をピークに下降線をたどってゆき、時代劇映画の人気も徐々に陰りが見えはじめた。1963年、時代劇王国を築いていた東映は、時代劇からやくざ映画への転換を試み、やくざの意地や義侠心を描いたヒット作を次々と生み出して全国の若者たちを熱狂させた。なかでも高倉健は、「日本侠客伝」シリーズや「昭和残侠伝」シリーズをはじめ、数々のヒット・シリーズに主演して時代の寵児となる。本作は1965年から1972年の間に計18作が製作された「網走番外地」シリーズの第1作。極寒の網走刑務所に収監中の橘(高倉)は、妹や病身の母に再会することを夢見ながらまじめに服役しているが、悪辣な囚人仲間こそそのかされて脱獄計画に巻き込まれてしまう。橘の更正を手助けする保護司役の丹波哲郎、「アラカン」の愛称で人気を博した時代劇の大御所・嵐寛寿郎、そして個性的な演技で脇を支える田中邦衛など、魅力的な俳優たちの競演も見所。

◆人生劇場 飛車角と吉良常



〔1968年／東映(東京)／カラー〕〔主な出演者〕鶴田浩二、高倉健、若山富三郎

尾崎士郎の名作として知られる「人生劇場」のうち、特に「残侠篇」に焦点を絞って、巨匠内田吐夢監督が演出した作品である。青春の悩み、男女の愛憎、男の俠気、巡り会いなどを描いたこの小説は、きわめて映画的な題材であり、これまでに幾度も映画化されている。内田自身もすでに1936年に『人生劇場・青春篇』を発表、評価を得て、その年の「キネマ旬報」ベストテン第2位を獲得している。題材としては2回目の挑戦であったが、中心となるのは青成瓢吉や彼をとり囲む文学の世界の人間たちではなく、飛車角や宮川、吉良常といった侠客たち、おとよ、お袖といった底辺を生きる女たちである。本作の製作された時期、「任侠映画」と呼ばれる一連の作品群が量産され、大衆的な人気を集めており、この作品もその一本として企画されたものである。とはいえ、個々の演出は力感と格調にあふれており、ラストシーンに立ちのぼる霧などに付加されたイメージは内田作品以外の何ものでもない。今からふりかえれば、鶴田浩二、若山富三郎、藤純子、高倉健などこのジャンルにおいて一時代を画した俳優たちが、そろって出演している点も意義深い。「キネマ旬報」ベストテン第9位。

上映時間

暁の脱走	(110分)	午前10時00分 ～ 午前11時50分
嵐を呼ぶ男	(100分)	午後 0時40分 ～ 午後 2時20分
網走番外地	(91分)	午後 2時40分 ～ 午後 4時11分
人生劇場 飛車角と吉良常	(109分)	午後 4時30分 ～ 午後 6時19分